

# ふるさと米子 探検隊

第5号 川とくらしの巻 2005年10月9日



川とくらし

編／発行 米子市立図書館

TEL0859-22-2612 FAX0859-22-2637

<http://lib.yonago-city.jp/lib/>

水は、人のくらしになくてはならない大切なものです。

中国山地のふもとにひろがる米子の町は、昔から豊かな水系に恵まれ、地下水から湧き出る泉を飲み水に使ったり、川の水を田畠の灌漑に利用してきました。

日本の農業は米作り（稲作）が中心で、大昔の田は川の水を利用するため、川の近くに作られました。そのうち用水とか井手という人工の川をひき、荒地を開墾して新しい村を作られ始めました。これを新田といいます。今から250年ほど前の江戸時代中頃に多く作られ、しだいに農村は発展してゆきました。

川の流れは、船で物を運ぶ水運に利用されたり、水車を使って米をついたり、油を絞ったりすることや、染め物を洗うことにも利用されました。しかし、渴水で水が無くなった時や、また反対に、大雨による洪水の被害などで、川の水の管理は大変難しいことでもありました。今、川はゴミなどで汚れ、魚や昆虫あまり見ることができません。自分たちの町の近くにある川の様子や歴史を調べ、きれいな川にするにはどうしたらよいか考えてみましょう。

## 探検隊の参考資料

図書館には、みんなの探検を助けてくれるたくさんの資料があります。

- ・「米川史」米川土地改良区／編・刊 1981 Y51/Y3
- ・「温故知新 25年のあゆみ」加茂川を美しくする運動連絡協議会／編・刊 2001 Y224/K11
- ・「加茂川流域の地域研究」米子南商業高等学校郷土研究グループ／編・刊 2001 Y224/Y25
- ・「たんぽ皆出来」日野川左岸土地改良区／編・刊 1988 0922/H1
- ・「尾高井手史」尾高井手土地改良区／編・刊 1993 Y614/02
- ・「とっとり土地改良史」とっとり土地改良史編集委員会／編  
水土里ネットとっとり／刊 2004 Y614/T6
- ・「人づくり風土記 31」(ふるさとの人と知恵 鳥取)農山漁村文化協会／編・刊 1994 Y20/N10
- ・「日野川下流域」日野川工事事務所／編・刊 1999 Y29/H17

( 資料名の後の数字と記号は「請求記号」です(ラベルの番号)。資料の配列場所を示しています。図書館にはこの他にもたくさんの資料があります。 )

## 米川

米川は日野川と法勝寺川が合流する米子市戸上の法勝寺川側から水を取り入れ、境港市までの弓ヶ浜半島20キロメートルを流れる人工の川です。

江戸時代の鳥取藩はとても苦しい財政でした。年貢（税）を米に頼る藩ではどうしても新しい田（新田）を開墾し、米の増収をはかる必要がありました。

藩では砂ばかりの荒地の弓ヶ浜半島に水路をつくることを計画し、在方役人（農村担当の役人）の米村所平が中心となって水路の工事に取り掛かりました。第1期工事は1700年（元禄13）で、戸上から浜橋までが開通しました。第2期工事は1725年（享保10）、富益村の源兵衛と大崎村の喜右衛門の二人の願いにより、浜橋から大崎と葭津の境の作兵衛浦まで掘り進めることができました。第3期工事は1758年（宝暦8）、大崎から境村まで、郡代の安田七左衛門の指導で掘り進め、1760年（宝暦10）に完成しました。日野川土手に立つ、「米川紀功之碑」には、米村所平の功績をたたえ、「米川」と呼ぶことになったことが書かれています。

また、米川の水流を利用して高砂（砂丘）を崩し、さらにその砂を中海に流すことによって、新しい土地が作されました。これが「流し新田」と呼ばれるものです。粟嶋新田、安倍新田、旗ヶ崎には日置新田、熊沢新田などが作られ、明治6、7年頃までは「灘町新田」と呼ばれていました。

水のない弓ヶ浜半島は米川が開通してから発展し、しだいに人口も増え、綿、さつまいも、藍などが作られるようになりました。夜見村では1734年から1834年までの100年間に、人口が11倍に増えたといわれています。

## 新開川

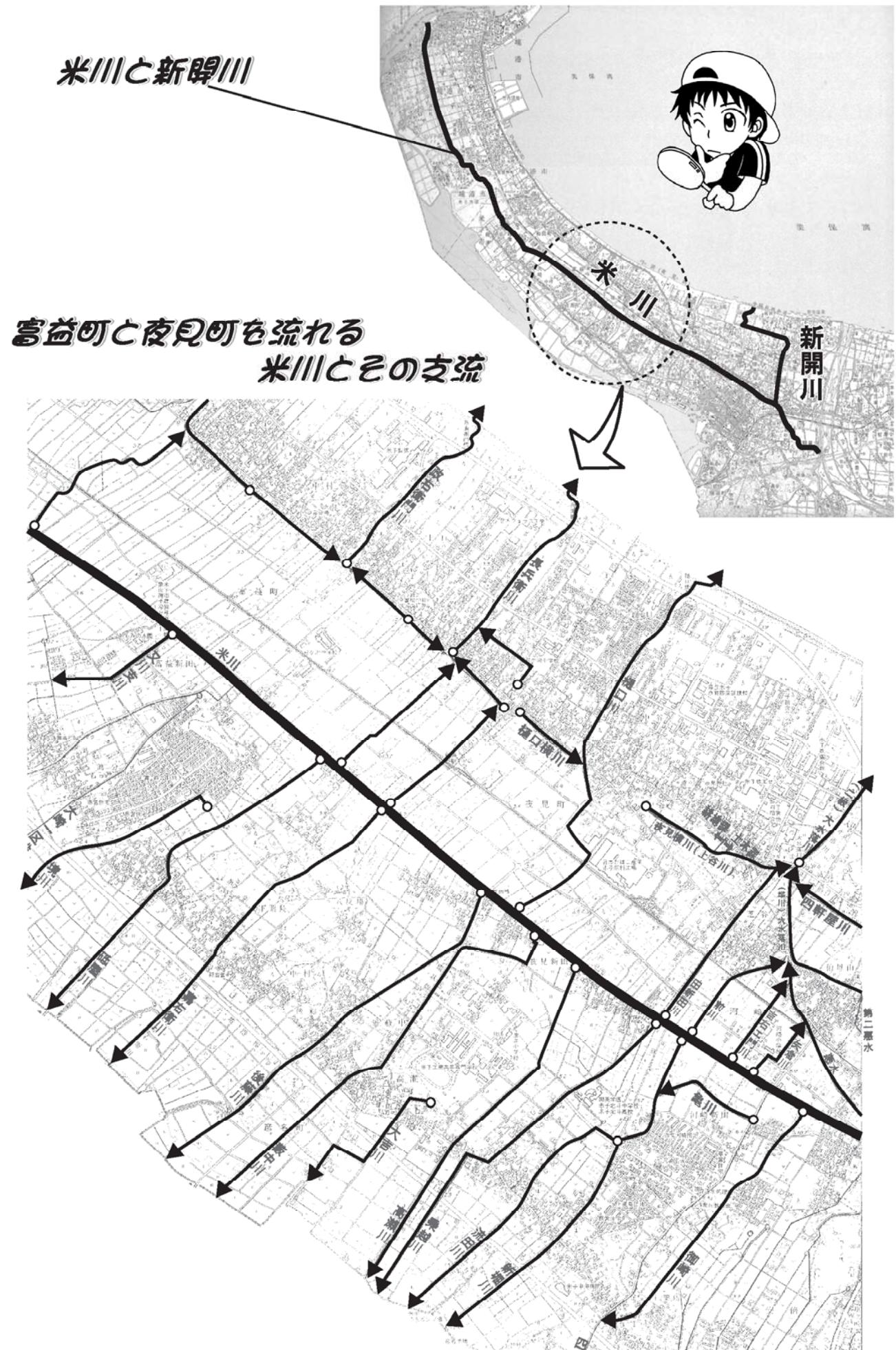
米川が開通したこと、弓ヶ浜半島では多くの農地ができましたが、米川の水が届かない美保湾側では、まだ荒れ地が多く残っていました。この荒れ地に水を引くための用水が新開川です。新開川は米子市車尾の米橋から250メートル下流へ下った米川から、上福原、東福原、両三柳へと約4キロメートル流れ、日本海へとそそいでいます。

この新開川の開発を計画したのが岩美郡富村生まれの牧田平四郎と米子市一部生まれの金田長八でした。二人は鳥取藩の河崎真之丞のすすめで、協力して新開川の開発に着手します。

新開川の開発には大きな問題がありました。新開川の開通によって米川の水量が減るのではないかという、農民たちの反対運動でした。しかし1872年（明治5）鳥取県権参事（知事）関義臣の仲介で、新開川の着工が認めされました。

最初に作られた水の取り入れ口は、今の場所とは異なり、取水口は米川と平行して作られていました。開通したのは1875年（明治8）で、戸上から和田村まで13キロメートルの長さでした。新開川の開通により、この流域に入植したのは旧鳥取藩の武士たち138家族で、主に綿を栽培しました。しかし1883年（明治16）の干ばつなどで、多くの家族はここから離れてゆきました。1925年（大正14）、新開川と米川の水の取り入れ口を一つにすることが決まりました。そうすると今度は米川を利用する農民と、新開川との農民の間で、深刻な水争いが始まりました。そこで1935年（昭和10）、米川と新開川を一つの川として、車尾の水門で水の配分を3対1にすることに決め、それが今も続いています。

## 米川と新開川



## かやいで 蚊屋井手

蚊屋井手は、伯耆町（旧岸本町）吉定地区の日野川から取水しています。

下流の遠藤集落で、東八幡方面と尾高・佐田川方面とに分かれ、さらに枝分かれして、日吉津村で海川排水路と新田川用水路・ホレコ川排水路となり、日本海にそいでいます。蚊屋井手は、箕蚊屋平野のほぼすべて、1130ヘクタールを灌漑しています。

洪水のたびに流れを変える“あばれ川”日野川によって箕蚊屋平野は作られました。日野川が現在の流れになったのは、1702年（元禄15）の洪水によるといわれています。それまでは福万・河岡・尾高方面を流れていました。上流のカンナ流し（砂鉄の採取のためにたくさんのドロ水を流すこと）のために、日野川の川床にはいつも土砂がたまっていて、洪水になりやすかったのです。水路が変わると、それまでの田んぼや家が土砂に埋まったり、新たな水路をめぐって水争いが起きました。現在の蚊屋井手は、1964年（昭和39）「箕蚊屋土地改良事業」で整備され、安定した水が流れるようになりました。

①蚊屋井手取水口と記念碑 ②海川排水路

## おだかいで 尾高井手

尾高井手は、伯耆町（旧溝口町）溝口中川島の日野川から取水しています。

大江川と清山川と吉定地区の別所川の下を暗渠（サイホン）でくぐり、押口・石州府・中福万・赤井手のところで佐田川に合流しています。この井手は、上細見地区の日野川より高い河岸段丘を流れ、約8キロメートルの長さがあります。伯耆町・米子市を合わせて125ヘクタールをうるおしています。

尾高井手はいつごろ作られたのか、はっきりわかりません。江戸時代の絵図には「尾高井手懸り樋門」として描かれています。いくつかの川の下を暗渠（サイホン）でくぐるなど、高度な技術と苦労の多い工事だったようです。現在の水路は1988年（昭和63）に改修事業で整えられたものです。

③尾高井手取水口と記念碑



## さのがわ 佐野川用水

佐野川用水は、伯耆町（旧溝口町）中祖地区の日野川から取水しています。

越敷山の東側、日野川左岸の山すそをトンネルで掘りぬいて水路を通し、谷あいには堤防を築き、長者原まで約9キロメートル続きます。坂長から二つに分かれ、一方は岩屋谷方面へ、もう一方は長者原をぬけて青木まで流れ、小松川に合流しています。

流域は米子市と伯耆町の水田226ヘクタール、間接受益地を含めると480ヘクタールの面積をうるおしています。

南部町（旧会見町）の豪農初代吉持五郎佐衛門が、1618年（元和1）に工事を始めて以来、11代めの吉持吉十郎まで続けられ、最後は鳥取藩の直営工事となり、1861年（文久1）に243年もかかって完成しています。水の無い長者原の高台一帯に水を引き、稻作ができるようにするために、ずいぶん上流から水を引かねばなりませんでした。機械のない時代、どうやって工事をすすめたのでしょうか。水路の勾配（高さ低さ）をどうやってはかったのでしょうか。

④佐野川取水口 ⑤佐野川トンネル

## ごせんごくいで 五千石井手

五千石井手は、伯耆町（旧岸本町）金廻元集落より水を取り入れています。

山すそを通り大寺・殿河内を経て、新庄・八幡・山市場・四日市に至る3キロメートルの水路で、支線の長さは24キロメートルにもなり、五千石平野233ヘクタールをうるおしています。

五千石井手はいつごろから作られたのかは、はつきりわかっています。越敷山の山すその水を下流に引いたのが始まりといわれています。五千石（江戸時代は石高で、取れる米の量を表した）もの米が取れる豊かな水田地帯になったのは、この井手のおかげです。大寺集落からは、奈良時代のものと思われる高さ1メートルもの石造りの鷺尾（お城の天守閣のしゃちほこに当たるもの）や、直径2メートルの仏塔の礎石が出上しています。大きなお寺を作ることの出来た豊かな豪族がいた証拠です。1985年（昭和60）に、佐野川とともに「日野川左岸整備事業」が開始され、五千石井手も改修されました。

⑥五千石井手取水口 ⑦石製鷺尾

## かも川

加茂川は島根県伯太町の鷲頭山が源で、米子市の新山、奈喜良、日原、宗像を流れ長砂で新開川と旧加茂川に分かれます。新加茂川は1932年（昭和7）から翌年にかけて開削された洪水対策の放水路で、久米町と祇園町の間で中海にそそいでいます。これが本流で9.5キロメートルの長さがあります。旧加茂川は長砂町から陽田町、米子市内の商店街の裏を流れ、尾高町で今は埋め立てられて道路になっている米子城の外堀につながり、中海に流れています。長さは3キロメートルあります。

法勝寺川と加茂川がよく氾濫するので、江戸時代宗形神社の所には加茂川を横切るように「宗像土手」がきずかれていました。加茂川に水門を作り、氾濫した水が米子の町へ流れ込まないようにせき止めをしたものです。今でもその一部が残っています。

加茂川は川はばが狭いために、大雨が降るとすぐにあふれ出し、米子の町はたびたび浸水しました。1964年（昭和39）7月の集中豪雨では、長砂前田橋近くの堤防がこわれ、駅前から商店街にかけて多くの家屋が浸水しました。1972年（昭和47）7月の豪雨でも、飯山が崩れて新加茂川をせき止めてしまい、この時もたくさんの被害がありました。

江戸時代の長砂と陽田では、油絞りのための水車小屋がありました。米子の町や弓ヶ浜半島では多くの綿が作られていきましたが、その実を水車ですりつぶして、あんどん用の油を絞っていました。そのかすは肥料として重宝されました。綿の実油は藩の専売品で、自由に売買できませんでした。

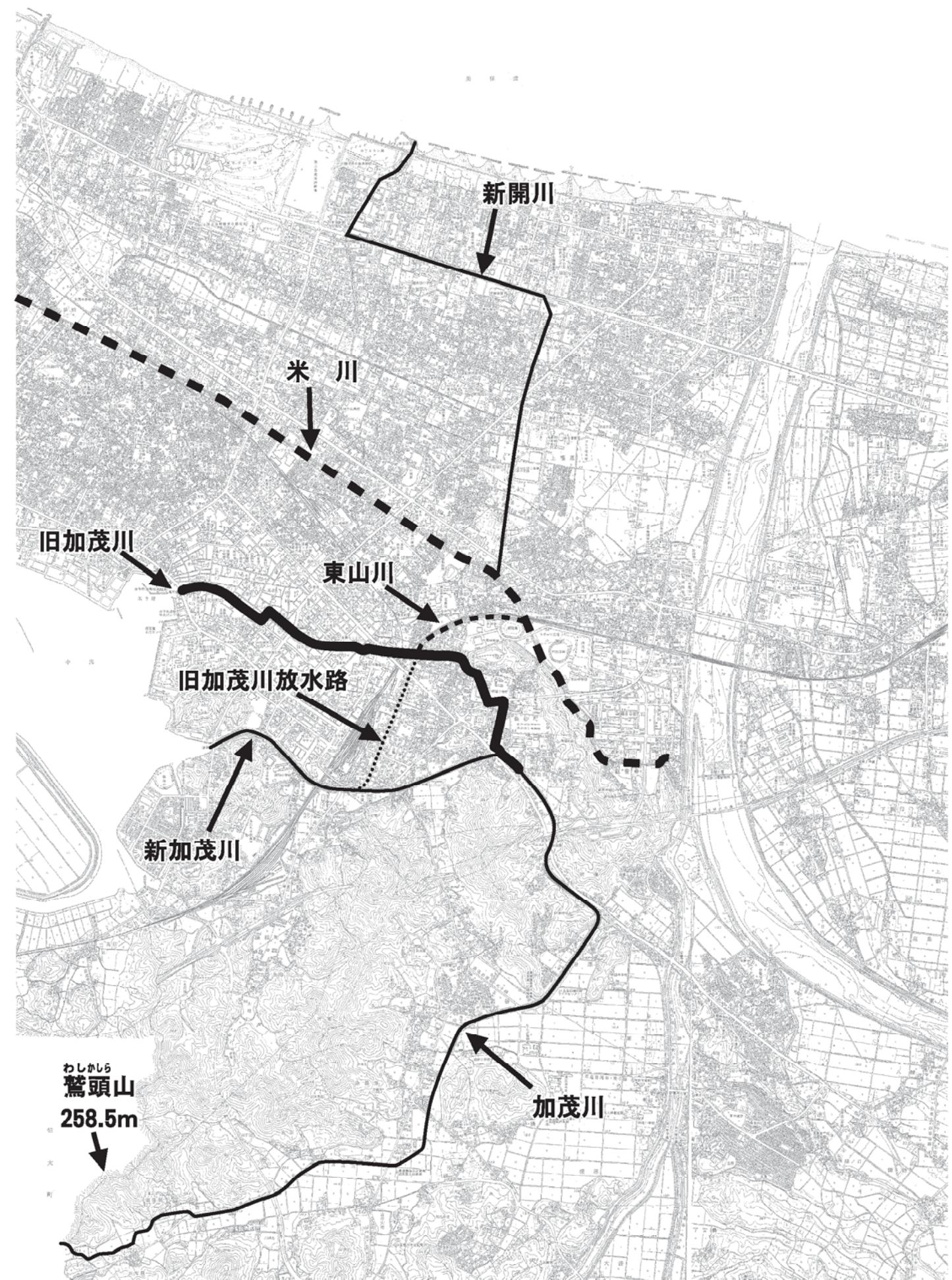
江戸時代の加茂川は、商家に荷物を運び込む役目を果たしていました。米、砂糖、油、塩、炭、こんぶ、たばこなどの商品は、中海の米子港についた船から小舟（はしけ）で加茂川をさかのぼり、それぞれの商家の裏口から運び込まれました。今でもその石段が残っています。

また、ふろしき、こいのぼり、節句ののぼりなどの染め物をする紺屋では、加茂川の水で染め物を洗っていました。

旧加茂川には江戸時代に付けられた名前を残す橋があります。土橋、ゆうがどう橋、善光院橋、覚證院橋などです。それぞれの橋のたもとには、お地蔵さんがまつてあります。お地蔵さんは、あの世とこの世の境に立って守ってくださる仏様で、特にこどもを守ってくださる仏様として信仰を集めています。8月23日には地蔵祭りが開かれているところもあります。

## 米子市南部のため池

市内南部の奥谷、陰田、吉谷、美吉、古市、橋本、奈喜良の地域は、法勝寺川と加茂川にかこまれたゆるやかな丘陵地で、水田まで両側の川から水を引くことができず、ため池を作って農業用水としました。年に一度池の水を抜いて池の底を掃除する、池さらえがおこなわれていましたが、この行事は村人全員参加でした。また村の人にはいしょで自分勝手に池の水を自分の田に入れることは禁止でした。これを「入り会い」といいます。これに違反すると「村八分」という罰がありました。



# さあ川の探検に出かけよう！



## ◎土橋と旧加茂川

- ・むかしの加茂川と人々のくらしのつながりを考えてみよう

## ◎新・旧加茂川分岐点

- ・なんのために新加茂川はつくられたのでしょうか



## ◎宗像土手跡

- ・土手の上にのぼって、あたりを観察してみよう

## ◎蚊屋井手取水口

- ・この井手の水はどこまで流れているのでしょうか



## ◎米川取水口

- ・江戸時代の人は、どうやって測量し、どうやって工事をすすめたのでしょうか



## ◎新開川取水口

- ・新開川の取水口の形を観察してみよう。  
どうしてこんな形になったのか調べてみよう



○2005年10月9日、探検隊第5号を使ってバスツアーよによる現地学習会を行いました。

(イラストは難波康子さん)